

羽毛製品は冬の防寒着として定着しましたが、いまだに羽毛の膨らみがなくなつた、羽毛が吹き出した、シニになつたなど様々なトラブルが生じています。今回は、中わた羽毛が移動した事故例を紹介します。

衣類の状態

クリーニング後、前身頃上部のキルティング部分について、左右の膨らみが少なく、中央の膨らみが多く感じられるとの申し出があつた。

原因

キルティングで区切った容積に対して羽毛の充填量が少ないと左の羽毛が中央に移動したもの。リュックなどの肩紐によつて肩付近から中央に寄つた可能性も推測される。

事故の防止対策

キルティングの容積に見合う十分な量の羽毛を充填すること。基本的にクリーニングの段階で防止する方法はない。

部分的な片寄りであれば、着用後に軽く叩くなどして羽毛を均等に広げることで、簡易的に修正できる。

羽毛製品

ガチョウやアヒルなどの水鳥から採取される羽毛には、ダウン(ワタ羽)とフェザー(羽根)の2種



ダウnjacket

監修／クリーニング総合研究所

素材
特性
に注意

圧縮回復性

水鳥の胸の部分に生えているワタ羽のダウンは、タンポポの種子のような形状で、中央に核(元羽軸)を持ち、ここから放射状にしなやかな羽枝が伸び、さらにその左右に小羽枝がついている。羽毛の羽枝には絡みあわづ反発しあう性質があり、羽毛のよじれや型崩れを防止すると同時に、何回折り畳んでもすぐに元の形に戻る。しかも、その反発が瞬間的なため、かさ高性も直ちに回復し、羽枝の間に再び大量の空気を含んで保温性も保たれる。

ダウnjacket製品のクリーニング

類があり、通常は両方を混合して使つている。

一般にはダウンの混用率の高いものほど高級とされており、中わた素材として優れた保温性、吸湿性と透湿性、圧縮回復性などの機能を持つ。

品質の優れたダウnjacketが十分に詰め込まれている製品であれば、羽毛製品に特有の膨らみの減少や中わたの片寄りなどは生じにくい。

羽毛自体はウエットクリーニング、ドライクリーニングどちらも可能だが、取扱表示、使用素材・生地加工、汚れの程度などを総合的に判断して、クリーニング処理方法を決める必要がある。

- ウエットクリーニングは、中性洗剤での押し洗いが基本で、脱水後は静止状態で乾燥し、ダウnjacketを静かに温め、温度を加えずにタングルをかける
- ドライクリーニングは取扱表示を考慮し、使用する溶剤を選定する。できるだけ短時間で処理を行い、タングル乾燥をする

前身頃の羽毛 後身頃の羽毛



羽毛の品質が異なっている可能性を考えて、肩付近の縫い目から前身頃と後身頃の羽毛を取り出し比較したが、形状や大きさなどに差は見られない



申し出があったキルティング部分
中央部に向けて生地が盛り上がっている



- 「衣料管理情報」は全ク連ホームページからPDFをダウンロードいただけます。
全ク連HP <https://www.zenkuren.or.jp>
- 「お知らせ」→「衣料管理情報」